

「物語り」を活用した NIESD の構想
伊藤 裕康(香川大学教育学部), 川田英之(香川大学教育学部附属坂出中学校)

Design of NIESD which utilized Narrative

Hiroyasu Ito, Hideyuki Kawada

1 はじめに

情報消費社会下の学校教育の課題に、子どものアイデンティティ形成の場の準備がある(伊藤 2009, 2010)。アイデンティティ形成の際、我々は社会・歴史的な文脈を参照する。参照の有力な手がかりに新聞がある。上手く新聞を活用し社会・歴史的な文脈を参照することが求められる。その際、我々自身がマスコミの「向こう側」を想像し、そこに歩み寄り、知り、発言するための公共性を高めるメディア・リテラシー教育を主張する板場(2013)に着目したい。氏は、マスコミと受信者という閉ざされた関係の外部を意識する初動段階として、我々自身がメディアだという認識をもつ有効性を指摘した。閉ざされた関係の外部の問題は、物語論における物語られない物語と物語の語り直しに通底している。

Newspaper in Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育に新聞を)と、Narrative in Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育の物語)を含意する NIESD は伊藤の造語である。本稿では、ESD の豊饒化に情報の視角が必要であり、NIE による ESD が有効であること、新聞が「物語り」であるという見方での NIE の有効性について述べる。

2 ESD で見過ごされている情報という視角

ESD と正対した問い「私たちと次の世代の生命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」を解くと、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年国際実施計画(案)」の課題は【犯罪】と【情報】が抜けていた。同計画(案)の課題に先の二つを組み込み(伊藤 2010)、再修正したのが表 1 である(伊藤 2015)。

表 1 「私たちと次の世代の生命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」に関わる課題

領域	課 題
社会・文化	【人権】人種や民族・性・障害等をめぐる差別や偏見の解消、いじめ・虐待等の防止とケア 【平和】戦争やテロの防止、核兵器・地雷・不発弾等の除去、海洋の安全【文化】異文化理解推進、歴史的遺産や文化等の多様性と伝承・継承【健康】HIV・エイズをはじめとしたグローバルな感染症等の病気の予防・治療と食や薬の安全【統治】民主的で誰もが参加可能な社会制度の実現、公正な権利と収益の保障【犯罪】地域や学校・家庭で起こる犯罪や非行・いじめ・虐待等の防止とケア 【情報】学校や家庭を超えた個人情報の漏洩、ネット犯罪、情報操作や扇動、情報格差の解消
環境	【天然資源・エネルギー】水・石油・原子力・レアメタル等の資源・エネルギーの維持、漁業資源の維持、森林破壊防止と生物多様性の保持【農業】持続可能な農業の実現【環境】地球温暖化等の地球環境破壊の防止と回復、森林破壊防止、海洋汚染の防止【農村開発】持続可能な農村生活の実現【都市】持続可能な都市生活の実現【災害】多発する風水害等の様々な自然災害の防止と緩和
経済	【貧困削減】途上国・先進国間、各国における経済格差や貧困の克服【企業の社会的責任・説明責任】企業の社会的責任・説明責任の促進【市場経済】公正な市場経済の実現

下線部は実施計画(案)で抜け落ちる課題(伊藤 2015,)

3 「物語り」と新聞

1) 「物語り」とは

「物語」が注目を集め、出自である文学理論や歴史理論の枠を超え心理学、社会学、医学、教育学等の人間科学の方法論や文化の基礎理論として用いられ、学際的で多様な展開をみせる。人間は「物語る動物」あるいは「物語る欲望に取り憑かれた存在」(野家 2005, 13)であり、「物語ることは、われわれが自己の生の歩みを理解し、世界のなかで経験することを理解するための普遍的な形式である」(毛利 2006, 22)と言われる。

やまだ(2000, 3)によれば、物語る行為は、「2つ以上の出来事(events)をむすびつけて筋立てる行為(emplotting)」である。これは、出来事を時間的コンテクストに位置づけ、関連づけることである¹⁾。「個々の出来事は同じでも、それをどのように結びつけるかによって、物語が変わる。たとえば、『幼い時に両親がなくなった』という出来事は変えられないが、『だから、自分は一人ぼっちだ』という出来事(行為)とむすぶか、『だから、自分は一人でも生きられる』という出来事(行為)とむすぶかによって、意味が大きく変わる。むすび方が変われば、人生の物語も、人生の意味も変わるはずである。』(やまだ 2000, 128)。筋立てることで経験を組織化し意味づけることで、自らの在り方を確認する²⁾。結び方によって意味が変わることから、人は自分の人生物語を繰り返し物語り、「人生物語の主人公である自分自身と折り合いをつけ、自分の身に降りかかった出来事の結末を『受け入れよう』とする」(毛利 2006, 7)。「人は、繰り返し物語りながら過去を再構成し、それによって未来を指向して生きる動物」(松本 2001, 2)である。

藤原(2004, 62)は、時間連鎖の形で関係づけられる出来事を語る行為やそれが生み出す言説、そうした行為を導く枠組みに関する理論を物語論と規定し、次のように述べる。

物語とは、まず、経験を物語る行為(ナラティブ)とみなされる。ナラティブ＝物語行為等を通して、人間は、現実においてであったさまざまな出来事を意味づけ関連づけながら、自身の経験をかたどっていく。この物語行為は、モノローグではなく他者との対話であり、これを通して語り手の経験にかかわる物語言説が社会的に構築されることになる。物語行為は、J.S.ブルーナが「物語的思考」と呼ぶ認知様式によって導かれる。これは、事象間の因果関係の理解にかかわる「論理－科学的思考」と対置される、人間の行為の意図や出来事の意味の解釈にかかわる認知様式である。ただし、こうした認知の源泉は、社会の中で構築・共有されてきた種々のタイプの言説(神話・愚話・劇など)が担保する物語(ストーリー)の枠組みに見いだすことができる。つまり、「物語的思考」という人間の認知は、そうした社会文化的な物語枠組みに淵源していることになる。

現在の物語論における物語概念は、経験を構築する物語行為、経験にかかわる物語言説、社会文化的な物語枠組み、という三つの側面から理解できる。三つの側面は、循環的な関係にある。社会文化的な物語枠組みに規定された物語行為が経験にかかわる物語言説を生み、そうした言説が物語枠組みを担保しつつ、さらに物語行為を導くといった関係である。

野家(2005, 300)は、物語を実態概念の「物語」(語られたもの、ストーリー)と機能概念の「物語り」(語る行為、ナラティブ)に分ける。物語りは、藤原の経験を構築する物語行為である。語られたものである物語は、藤原の経験にかかわる物語言説である。

本稿では、従来の物語の定義が多く踏まえられる布施(2009, 127)の「目的に基づく時間構造もち、自らを社会の文脈の中に位置づけ説明づけ定義づけ、自らの生を意味づけ、生き方を方向づける行為」という物語の定義を下敷きに、物語を規定する。例えば、「目的に基づく時間構造もち……自らの生を意味づけ、生き方を方向づける行為」は、「人は、繰り返し物語りながら過去を再構成し、それによって未来を指向して生きる動物」と関わり、出来事を時間的コンテクストの中に位置づけ、関連づけることである。「自らを社会の文脈の中に位置づけ説明づけ定義づけ」は「社会文化的な物語枠組み」と通底し、経験の組織化

である。だが、布施の定義には物語ったものである「物語」の位置づけがよく分からない。

伊藤は、物語る行為と物語られたもの（自己の物語や社会文化的な物語枠組み）が循環的な関係にあることから、両者を視野に入れ学習を構想する。そこで、まず、「物語」と「物語り」を包摂するものとして「物語り」と表記する。次に、「物語り」を「目的に基づく時間構造もち、仲間と語り合って自らを社会の文脈の中に位置づけ説明づけ定義づけ、自らの生を意味づけ、生き方を方向づける行為とその行為により生成されるもの」と規定する。

2) 「物語り」としての新聞

以下、香川大学教育学部附属坂出中学校(以後本校)研究集会(2013/6/18)で、伊藤が、新聞も「物語り」でありNIEと本校の研究が接合できることを示したレジュメの一部を載せる。

1) 物語としての新聞

- ・ニュースを物語として論じることへの批判→複数のジャーナリストによる同一事件についての相互に極めて類似した報道＝報道の客観性を証明するもの

- ・ニュースの物語性を強調する研究者の主張

確かに個々のジャーナリストは物語の作者ではないから報道の類似性は生じる。ただし、ジャーナリストが事実の客観的な情報伝達者であるということではない。共通の物語に沿って報道せざるをえないのである。ジャーナリストやマス・メディア組織がある出来事を報道する際、彼らはその出来事が発生する以前から存在している物語に従って事実を物語へと変換するため、どの物語を採用するかを自由に選択することは困難である。むしろ、ジャーナリストは、社会で共有されている「集合的記憶」や「神話」に大きく影響されながら、そうした神話を再生産するような形で物語の選択を行う傾向がある（津田 2006, 64）。

- ・ニュースを物語として論じることへの批判→複数のジャーナリストによる同一事件についての相互に極めて類似した報道＝報道の客観性を証明するもの

- ・ニュースの物語性を強調する研究者の主張

確かに個々のジャーナリストは物語の作者ではないから報道の類似性は生じる。ただし、ジャーナリストが事実の客観的な情報伝達者であるということではない。共通の物語に沿って報道せざるをえないのである。ジャーナリストやマス・メディア組織がある出来事を報道する際、彼らはその出来事が発生する以前から存在している物語に従って事実を物語へと変換するため、どの物語を採用するかを自由に選択することは困難である。むしろ、ジャーナリストは、社会で共有されている「集合的記憶」や「神話」に大きく影響されながら、そうした神話を再生産するような形で物語の選択を行う傾向がある。（津田 2006, 64）

出来事の経過や原因を詳細に論じるためには、入念な調査が必要であり、通常のジャーナリストが日々の時間的制約のなかでそれを行うことは難しいからである。そのため、しばしば既存の物語が流用され、出来事の解説を行われるという事態が生じることになる。

そのような既存の物語がとりわけ大きな影響ぼすのが、報道されている出来事を引き起こしたとされる個人の「動機」の解説である（津田 2006, 70）。

ミルズによれば、人は自らの行為の動機について語る際、社会的に認められうる動機の語彙のなかから選択を行う一方、他人の行為に関しては自らが納得できる動機の語彙を介してそれを解釈しようとするのである。この動機の語彙は、時代状況において変化しうるものであり、中略。ジャーナリストも「わかりやすい」動機の語彙に照らし合わせて、報道対象の動機について解釈し、プロットを作成していくことになる（津田 2006, 71）。

事件の捜査にあたる警察側の物語がマスメディアによって増幅され、一人の被害者が犯人に仕立てられていったのが、いわゆる「松本サリン事件」である。（井上 1997, 37）

社会面などでは「近所の人たちの声」が紹介されているが、ここでは、農薬調合の失敗という物語によって事件に一樣の説明が与えられ、わけのわからないことから来る不安が解消されていく様子がうかがわれる。（井上 1997, 38）→他者から承認されそうな物語の紡ぎだし

メディアによって流布される物語が受け手の秩序感覚に呼応しながら、誰もがこの会社員・河野義行氏を犯人と思い込んでしまうような状況がつくられていく。（井上 1997, 39）

2) 新聞と人間形成・社会形成（略）

4 NIESD の構想と展開—香川大学教育学部附属坂出中学校の『語り合う』中で自己の『ものがたり』をつむぐNIEの実践より—

1) NIESD が依拠する人間観と授業目的

NIESD が依拠する人間観と授業目的は、下記の通りである。「物語り」を活用した NIESD は、「人間・社会は根源的に物語る存在である」という人間観に依拠する。ESD に関わる

NIESD が依拠する人間観
人間・社会は根源的に物語る存在である。
NIESD の授業目的
社会的自己物語の批判的構築をめざす。

ニュースが掲載される物語としての新聞を活用して学習を展開することにより、「持続可能な開発のための教育の物語」の紡ぎ出しを行う。そして、メディアによる秩序構成の在り

方を問う力を育成した上で社会的自己物語の批判的構築を図ることを授業目的とする。

2) 香川大学教育学部附属坂出中学校の『語り合う』中で自己の『ものがたり』をつむぐ NIE

本校は、平成24年度に『学ぶこと』と『生きること』の統合ーかかわり合う中で、自己の学びをつむぐー」をテーマに研究を公開した。研究の柱はアクションラーニングとナラティブである。ナラティブを活用した授業構成の研究を進めてきた伊藤は、平成24年度より本校校長に併任され、シンポジストとして当事者性を持たせアイデンティティを確立する「物語り」としての授業について述べた。大会終了後、次期大会に向け研究部長の川田英之から研究テーマの相談を受けた。ナラティブをさらに進め「物語り」を基軸とした授業の推進を進言し、教職員全員で討議し、平成25年度から研究テーマを『学ぶこと』と『生きること』の統合ー語り合う中で自己の『ものがたり』をつむぐーとし、平成26年度研究大会を開催した。また、前述したようにNIEと本校の研究とが接合可能なことから、『語り合う』中で自己の『ものがたり』をつむぐNIE」をNIE研究のテーマとし、平成25年度から2年間の香川県NIE推進協議会研究指定を受けた。

以下に、平成25年度第2回香川県NIE実践報告会(2013/11/16)での川田の発表資料の一部を載せる。ESDの有力な視角となる【情報】の「情報操作や扇動」と関わる実践である。

中学校国語科の教科書では、『正しい』言葉は信じられるか(東京書籍3年)「論理の展開に着目して読もうー新聞の社説を比較するー」(光村図書3年)という単元があり、新聞記事の言葉や論理の違いに着目した読み比べの観点

が示されている。PISA型読解力では、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という三つのプロセスが設定されている。まずテキストの中から根拠となる情報(客観的な事実・データ)を取り出し、その意味を適切に「解釈」して、具体的な理由を示すことが必要になる。これにより、立場の異なる人とコミュニケーションが図れるようになる。OECDの設定した「キーコンピテンシー」の一つに「社会的に異質な集団で交流する力」があるが、こうした論理的な思考力・表現力を求めている。

新聞記事の読み比べを通して、こうした力を育成することをねらいとして授業を行う。

ここでは、本校3年生を対象に、筆者(川田英之、引用者補足)が教育実習生滝本千紘、森奏子(ともに香川大学教育学部学校教育教員養成課程中学校サブコース)と25年9月に実践した授業を報告する。

第三学年〇組 国語科学習指導案

1. 単元名 「論理の展開に着目して読もう」

2. 単元について

(1) 今日、様々な情報が錯綜する中、どの情報媒体に一番信頼を置けるか判断が難しい。中でも新聞は信頼を置ける媒体であるという認識がある可能性がある。そのような認識がある新聞さえ多くの記者たちが執筆した記事の集合体であり、そこには事実だけではなく彼らの意図も含んでいる。

今回は四国新聞と朝日新聞、毎日新聞における同じ内容の記事を比較し、「写真」「見出し」「本文」等からその共通点や相違点を見付け、その意図から意見文を書くことで、中学校学習指導要領の「B 書くこと」の「(1)イ 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと」、「C 読むこと」の「(2)イ 論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと」ができる教材である。

(2) 本学級の生徒は全体的に学習に前向きに取り組む、積極的に挙手や発言をする生徒が多い。意見交流についても普段から活発にしているため、グループ活動にも大きな問題はないように思われる。

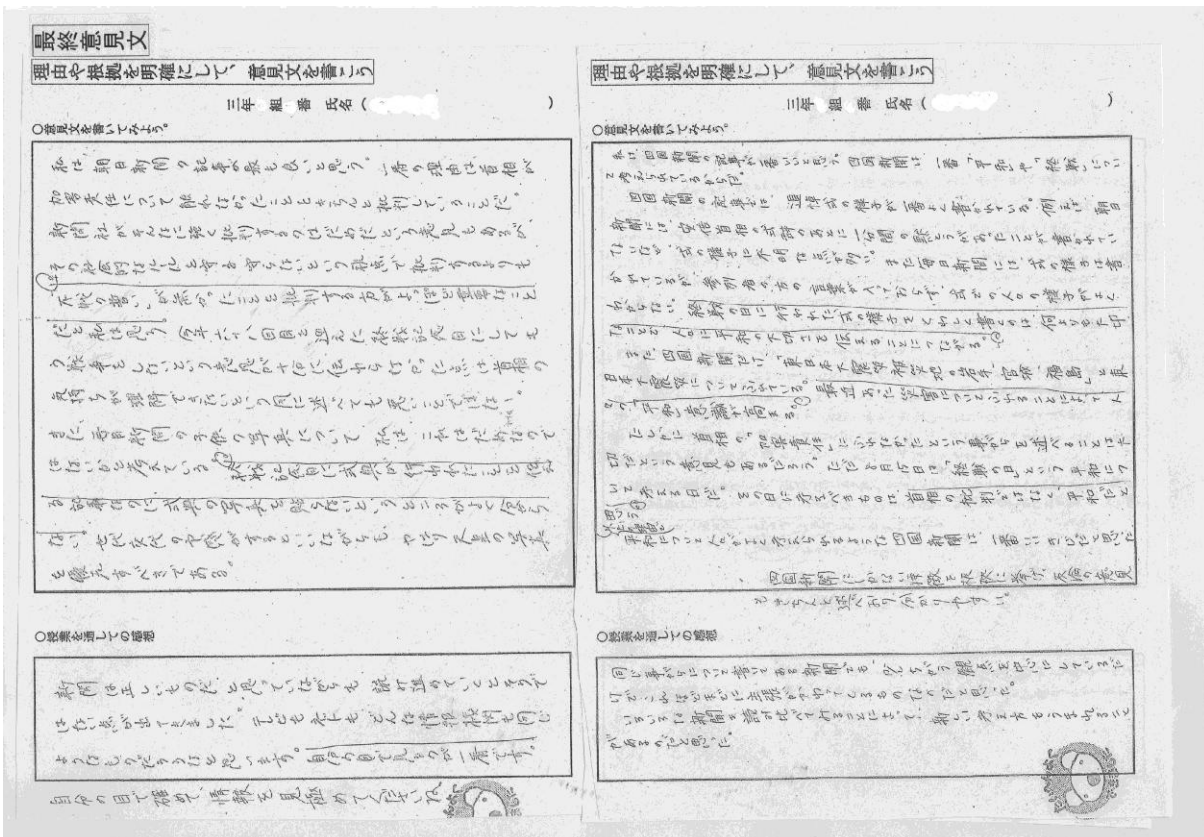
今回の題材である新聞については、本学級の生徒は他の教科の課題で触れる機会があるため、あまり抵抗なく単元に臨むことが出来るだろう。ただ、新聞には事実だけでなく記者の意図も含まれていることを認識するまでには至っていない。

(3) 本単元では、ワークシートを用い、三社の記事を比較する。比較する際、文体等の構成の違いや写真等を見比べる等、着目する要素を示す。ワークシートを活用して三社の記事の違いを明確にし、意見文を書くためのメモを作らせることでスムーズに文章を作ることに繋がる。ワークシートを活用し、三社の記事の共通点や相違点を明確にした上で、何故自分がその記事を選んだのかその理由や根拠を「写真」や「本文」等から明らかにして意見文に取り組む。

<p>3. 学習目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三社の新聞記事を読み比べ、その違いや記者の意図に気付くことができる。 ・自分の立場を明確にし、根拠や理由をもって意見文を書くことができる。 <p>4. 学習指導計画</p> <p>(1) 二社の新聞記事と比較し、違いについて交流する。・・・2時間</p> <p>(2) 自分自身の気づきや全体で交流した情報を基に意見文を書かせる・・・1時間</p> <p>5. 本時の学習指導（第1時）</p> <p>(1) 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数社の新聞記事と比較し、それぞれの情報や構成を書くことができる。 ・他者と意見交換し、自分の意見を深めたり再認識したりすることができる。 <p>(2) 学習指導過程</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学習活動</th><th>予想される生徒の反応</th><th>指導上の留意点</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1. テレビ、雑誌、インターネット、新聞と比較し、どれが一番信頼できる情報なのかを考える。</td><td>○情報媒体と比較し、自分が一番信頼のおけるものを考えようとする。</td><td>○なぜ、その情報が信頼できないと考えるのか、信頼できると考えるのか、根拠を挙げさせる</td></tr> <tr> <td>2. マクドナルドについての新聞記事の比較をする。</td><td>○見出し、写真、本文がそれぞれ違い、受ける印象が違うことを確認している。</td><td>○新聞記事を読む際に、相違点や共通点に気が付くようにするために注目して見るべき観点を強調する。</td></tr> <tr> <td>(1) 隣の人と気が付いたことを話し合い、発表する。</td><td>○小さな記事でも、記者の意図が入っていることを理解しようとしている。</td><td>○なぜその記事がいいと思うのか、理由を明確にするよう指示する。</td></tr> <tr> <td>(2) どちらの新聞記事の方が良いか考え、発表する。</td><td>○同じ出来事を伝える記事でも、書いてあることがそれぞれ違うことを確認している。</td><td>○机間指導を行い、進みが遅い生徒に助言をしたり、良い意見を書いている生徒を確認したりする。</td></tr> <tr> <td>3. 朝日新聞・四国新聞・毎日新聞の三社の新聞記事と比較する。</td><td>○他人と意見を交換し、気が付かなかった点に気が付いたり、自分の意見を再認識したりしている。</td><td>○自分の意見を区別するために、グループで出した意見は青色で、全体で出した意見は赤色で書き加えるように指示する。</td></tr> <tr> <td>(1) サークルマップにそれぞれの特徴を書き込む。</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>(2) 四人組を作り、意見交流を行う。</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>(3) 全体で交流する</td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table> <p>(3) 評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに、二社の新聞記事と比較してそれぞれ特徴を書くことができたか。 ・根拠を明確にして、どの記事の方がいいか自分の意見を書くことができたか。 <p>5. 本時の学習指導（第2時）</p> <p>(1) 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人の意見を聞き、自分の意見を深めたり、再認識したりすることができる。 ・根拠や理由を明確にし、意見文を書くことができる。 <p>(2) 学習指導過程</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学習活動</th><th>予想される生徒の反応</th><th>指導上の留意点</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1. 前時の復習をする。</td><td>○前回のワークシートを見て、どのような観点で新聞記事を読み比べたのか、確認している。</td><td>○前回、新聞を読み比べた際に用いた観点を確認する。</td></tr> <tr> <td>2. サークルマップについて、全体で共有する。</td><td>○他の人が挙げる意見を聞いて、自分の意見を深めている。</td><td>○あらかじめ読んでいる意見を参考に、挙手が少ない場合は指名する。</td></tr> <tr> <td>3. それぞれの新聞の主張を、ワークシートにまとめる。</td><td>○サークルマップを参考にして、自分の考えをまとめている。</td><td></td></tr> <tr> <td>(1) 個人で考える。</td><td>○他人の意見を聞いて、自分の意見を広げようとしている。</td><td>○他人の意見を書き込むときは、色つきのペンで自分の意見区別できるように指示する。</td></tr> <tr> <td>(2) グループで考える。</td><td>○自分の意見を発言することによって、自分の意見を再認識している。</td><td></td></tr> <tr> <td>(3) 全体で共有する。</td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table> <p>(3) 評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人の意見を聞き、考えを深めることができたか。 ・根拠や理由を明確にして、どの記事の方がいいか説得力のある文章を書くことができたか。 			学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点	1. テレビ、雑誌、インターネット、新聞と比較し、どれが一番信頼できる情報なのかを考える。	○情報媒体と比較し、自分が一番信頼のおけるものを考えようとする。	○なぜ、その情報が信頼できないと考えるのか、信頼できると考えるのか、根拠を挙げさせる	2. マクドナルドについての新聞記事の比較をする。	○見出し、写真、本文がそれぞれ違い、受ける印象が違うことを確認している。	○新聞記事を読む際に、相違点や共通点に気が付くようにするために注目して見るべき観点を強調する。	(1) 隣の人と気が付いたことを話し合い、発表する。	○小さな記事でも、記者の意図が入っていることを理解しようとしている。	○なぜその記事がいいと思うのか、理由を明確にするよう指示する。	(2) どちらの新聞記事の方が良いか考え、発表する。	○同じ出来事を伝える記事でも、書いてあることがそれぞれ違うことを確認している。	○机間指導を行い、進みが遅い生徒に助言をしたり、良い意見を書いている生徒を確認したりする。	3. 朝日新聞・四国新聞・毎日新聞の三社の新聞記事と比較する。	○他人と意見を交換し、気が付かなかった点に気が付いたり、自分の意見を再認識したりしている。	○自分の意見を区別するために、グループで出した意見は青色で、全体で出した意見は赤色で書き加えるように指示する。	(1) サークルマップにそれぞれの特徴を書き込む。			(2) 四人組を作り、意見交流を行う。			(3) 全体で交流する			学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点	1. 前時の復習をする。	○前回のワークシートを見て、どのような観点で新聞記事を読み比べたのか、確認している。	○前回、新聞を読み比べた際に用いた観点を確認する。	2. サークルマップについて、全体で共有する。	○他の人が挙げる意見を聞いて、自分の意見を深めている。	○あらかじめ読んでいる意見を参考に、挙手が少ない場合は指名する。	3. それぞれの新聞の主張を、ワークシートにまとめる。	○サークルマップを参考にして、自分の考えをまとめている。		(1) 個人で考える。	○他人の意見を聞いて、自分の意見を広げようとしている。	○他人の意見を書き込むときは、色つきのペンで自分の意見区別できるように指示する。	(2) グループで考える。	○自分の意見を発言することによって、自分の意見を再認識している。		(3) 全体で共有する。		
学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点																																																
1. テレビ、雑誌、インターネット、新聞と比較し、どれが一番信頼できる情報なのかを考える。	○情報媒体と比較し、自分が一番信頼のおけるものを考えようとする。	○なぜ、その情報が信頼できないと考えるのか、信頼できると考えるのか、根拠を挙げさせる																																																
2. マクドナルドについての新聞記事の比較をする。	○見出し、写真、本文がそれぞれ違い、受ける印象が違うことを確認している。	○新聞記事を読む際に、相違点や共通点に気が付くようにするために注目して見るべき観点を強調する。																																																
(1) 隣の人と気が付いたことを話し合い、発表する。	○小さな記事でも、記者の意図が入っていることを理解しようとしている。	○なぜその記事がいいと思うのか、理由を明確にするよう指示する。																																																
(2) どちらの新聞記事の方が良いか考え、発表する。	○同じ出来事を伝える記事でも、書いてあることがそれぞれ違うことを確認している。	○机間指導を行い、進みが遅い生徒に助言をしたり、良い意見を書いている生徒を確認したりする。																																																
3. 朝日新聞・四国新聞・毎日新聞の三社の新聞記事と比較する。	○他人と意見を交換し、気が付かなかった点に気が付いたり、自分の意見を再認識したりしている。	○自分の意見を区別するために、グループで出した意見は青色で、全体で出した意見は赤色で書き加えるように指示する。																																																
(1) サークルマップにそれぞれの特徴を書き込む。																																																		
(2) 四人組を作り、意見交流を行う。																																																		
(3) 全体で交流する																																																		
学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点																																																
1. 前時の復習をする。	○前回のワークシートを見て、どのような観点で新聞記事を読み比べたのか、確認している。	○前回、新聞を読み比べた際に用いた観点を確認する。																																																
2. サークルマップについて、全体で共有する。	○他の人が挙げる意見を聞いて、自分の意見を深めている。	○あらかじめ読んでいる意見を参考に、挙手が少ない場合は指名する。																																																
3. それぞれの新聞の主張を、ワークシートにまとめる。	○サークルマップを参考にして、自分の考えをまとめている。																																																	
(1) 個人で考える。	○他人の意見を聞いて、自分の意見を広げようとしている。	○他人の意見を書き込むときは、色つきのペンで自分の意見区別できるように指示する。																																																
(2) グループで考える。	○自分の意見を発言することによって、自分の意見を再認識している。																																																	
(3) 全体で共有する。																																																		

次から生徒の感想とワークシートの一例を載せる。

<p>○今自分の家ととっている新聞だけでなく、いろいろ情報を見極めなければいけないと感ずることができました。色々切り口が違っていておもしろかったです。</p> <p>○新聞というのはそれぞれの新聞で見出しも写真も内容も違うことが分かりました。私は新聞を読んだことがないので、ここまで違うと思うとびっくりしました。でも読んでとてもよく分かりました。よかったです。</p> <p>○こんなふうにたくさんの新聞を読み比べたことはなかったので、たくさんの気づきが生まれました。それぞれの社で工夫している点があっておもしろかった。また、写真や見出しを少し変えるだけでも大きく印象が変わることに気づき驚いた。</p> <p>○新聞は正しいものだと思っていながらも読み進めていくとそうではない点が出てきました。テレビもネットもどんな情報機関も同じようなものだろうなと思います。自分の目で見るのが一番です。</p> <p>○授業回数を重ねていき、それぞれの新聞をより深く読み比べていくうちに、良さ悪さが見つかり、自分の意見も変わっていききました。なぜ自分の家はその会社の新聞をとっているのか知りたいと思いました。</p> <p>○家は読売新聞をとっている所以他社を読む機会と言えば旅行先くらい。なので「比べる」ということを一度もしたことがなかった。こんなにも同じことを記事にしているはずなのに差があるのかと思った。情報は身の回りにたくさんあるので見合わせるの大変だと思う。</p>
--



5 終わりに

実践し終えた川田は、次のように本校のNIEを述べる。下線部は、川田が新聞を「物語り」だと認識していることを表わすとともに、新聞が「「物語り」」であることが分かる。

次のような笑い話がある。

本校の3年生K君は、野球部の中心選手である。K君の兄も、K高校野球部で活躍し、昨夏は県大会決勝戦で惜しくも敗れたものの、今年は主将として甲子園にも出場するなど活躍した。

昨年の決勝戦、球場で応援していたK君のもとにA新聞社の記者が取材にやってきた。

記者「お兄ちゃんはいかがですか？」

K君「・・・はい」（こう聞かれたら「はい」としか答えようがないなとK君は思ったらしい）

記者「（リードされている展開だけど）まだまだいけそうですか？」

K君「・・・はい」（これも「はい」としか答えようがないなとK君は思った）

翌日のA新聞には次のような記事が載った。

「応援に来ていたK選手の弟〇〇君は『かっこいい。まだまだいける。』」（K君は小学生のコメントみたいで恥ずかしい思いをした。でもあの場面でもし「いいえ」と言っていたら記事にはならなかっただろうとも思ったようだ。）

そして今年の決勝戦。またA新聞社の記者がやってきたので、今度はかなり用心して慎重にコメントした。「兄はあこがれです。」K高校が9回にだめ押しの1点。その際のコメントを求められたので「良かったです。」と答えた。

翌日のA新聞には次のような記事が載った。

「兄はあこがれです。最後の1点が良かった。」

（K君は「最後の1点が良かった。」などと「上から目線」で言っているようでまたまたとても嫌な思いをしたようだ。）

さて、この話から何が見えてくるか。ジャーナリストは事実の客観的な伝達者ではないということである。「事実」はさて、この話から何が見えてくるか。ジャーナリストは事実の客観的な伝達者ではないということである。「事実は事実として存在するのではない。そこには書き手の既存の物語が存在し、それに沿った形で一定の筋道を与えながら語る」のである。K君の場合は、書き手に「活躍する兄にあこがれをもち、一生懸命応援する家族」という物語があり、その物語に沿わないものを排除する形で報道がなされている。また、客観的事実は変えられないから、どうしても報道の類似性が生じてくる。そこで他との違いを出したり、際立たせたりしようとする際にも、書き手の「物語」が影響を与える。＜現実＞は社会的に構成されているものである。

こうした「物語」が全て悪いとは言わない。社会や文化として存在する大きな物語は、人々が社会的規範や価値を受け入れる上で重要な役割を果たす。世の中には多くの物語が存在し、私達は物語に囲まれながら成長する。と同時に「語られていない物語」「隠されている物語」に目を向ける姿勢が私達には必要である。報道によって語られた「物語」に積極的にかわり、「語られていない」ものに目を向け、与えられた物語を「語り直す」ことが重要である。

これが（香川大学教育学部附属坂出中学校が目指す、引用者補足）『語り合う』中で自己の『ものがたり』をつむぐNIEである。

では、生徒はどのように新聞を捉えているのか。以下に最終意見文を載せる。これを見ると、この生徒は、「平和の物語」ということから新聞の比べ読みをしている。一番「平和の物語」が紡がれているのが毎日新聞だったから、毎日新聞に共感しているのである。

＜最終意見文例＞

ぼくは毎日新聞の記事が一番良いと思った。

毎日新聞は他社とは違い、子どもが手を合わせた写真を使っている。これは終戦したけれど子どもたちにも平和は受け継がれている、ということが書きたかったのではないかと思う。その点で見ると天皇陛下が手を合わせているよりも、子どもが手を合わせているほうが伝わりやすいだろう。

また後半では、安倍首相の式辞の変化、そして憲法と政治の変化のことについて述べられている。この変わる日本というものと変わらない日本ということの二つを対比して書いているのでおもしろい。

朝日新聞は「加害責任」に注目しているから良いという意見もあるが、ぼくは本当に注目すべきなのは「平和」だと思う。

八月十五日は終戦記念日で戦争が終わった日なのだ。たしかに安倍首相の発言も大事だろう。しかし、戦争が終わった日だ、ということが重要なのだ。

そのような視点から見ると、やはり「平和」を中心として書き、色々な工夫をしている毎日新聞が良いと思う。

ESD の豊饒化には情報の視角が必要である。情報の視角を持つために、NIE が有効なことは想像に難くない。しかも、新聞は教科書と違いタイムリーな ESD で取り上げたい記事が掲載される。NIE で ESD を実践することは、効果的な ESD と成り得る。また、NIE そのものの推進にも役立つ。一方、新聞が「物語り」であるとの見方をもつことは、川田の新聞を「物語り」であるという認識や生徒の最終意見に見られるように、新聞そのものをメタ的に見る姿勢の担保ができ、マスコミと受信者という閉ざされた関係の外部を意識する初動段階となる。そして、物語られないものを意識することになる。

NIESD が依拠する人間観と授業目的について、本実践は十分に正対できていない。NIESD は緒にもついたかどうかの段階である。今後とも実践研究を積み重ね、NIESD を確立して行きたい。

本研究は、平成 26 年度香川大学教育学部 学部・附属共同プロジェクト研究費及び平成 26～27 年度科学研究費基盤研究 C 『新たな学び』への実践的指導力を育成する社会科教員養成カリキュラムの研究』の一部を使用した。

注

- 1) やまだ (2007) は、物語の定義では時間的定義が多いと指摘する。例えば、「私が起きたとき雪がふっていてびっくりした。」は、「私が起きたとき (始まり)」「雪がふっていて (中間)」、「びっくりした (終わり)」という時間的秩序で語られる。このように、「始まりー中間ー終わり」という時間秩序と調和的形態を重視する。「始まりー中間ー終わり」という時間秩序を前提にしないやまだの生成的定義も、二つの出来事をむすぶことで時間的コンテクストに位置づけ関連づける。どちらの物語の定義も、出来事を時間的コンテクストの中に位置づけ関連づける点では共通する。
- 2) 物語が、経験を組織化するものことについて、時間的定義をとる野家啓一は、「経験は『物語』を語る言行為、すなわち物語行為を離れては存在しないのであり、逆に、物語行為こそが『経験』を構成するのである、と。」(野家 2005, p. 85) と述べる。時間秩序の前提の有無とは関係なく、物語が経験を組織化するものであることは共通する。

文献

- 井上俊「物語としての人生」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊也編集『岩波講座現代社会学 9 ライフフォーの社会科学』, pp. 11-27, 岩波書店, 1996
- 板場良久「メディアと教育」池田理知子『メディア・リテラシーの現在』, pp. 19-39, ナカニシヤ出版, 2013
- 伊藤裕康「情報消費社会と有用性のある地理学習」地理学報告 108 号, pp. 21-14, 2009
- 伊藤裕康「情報消費社会における社会科地理学習のあり方ー持続可能な社会を目指す子ども参加の地理学習を例としてー」地理教育研究 6 号, pp. 15-24, 2010
- 伊藤裕康「水問題を基軸とした持続可能な社会形成のための社会科学習」教材学研究第 27 巻, 2015, 印刷中
- 津田正太郎「物語の公共性とメディアー『シニク・ナショナリズム』を超えて」金井明人・土橋臣吾・津田正太郎編著『メディア環境の物語と公共圏』法政大学出版局, pp. 11-39, 2013
- 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫, pp. 181-182, 2005
- 藤原顕「物語論」日本教育方法学会編『現代教育方法事典』, 図書文化, p. 62, 2004
- 布施元「環境問題の解決のための『物語』に関する考察ー共生の視点を契機としてー」共生システム研究 Vol. 1, 3, No. 1, p. 127, 2009
- 松本健一「総合学習・学びのプロローグ」カリタス小学校／松本健一編集『共同で物語る総合学習 自分をみつめる・自分をみつめる』川島書店, 2001
- 毛利猛『臨床教育学への視座』ナカニシヤ出版, 2006
- やまだようこ「人生を物語ることの意味」, やまだようこ編『人生を物語る』ミネルヴァ書房, 2000。
- やまだようこ「ライフストーリー・インタビュー」, やまだようこ編『質的心理学の方法ー語りを聞くー』新曜社, p. 127, 2007